

第4回 2010年1月20日(水)

ゲスト 朝日放送元専務 山内久司

「制作者の“志”のなさを訴える」

司会

朝日放送の元専務でドラマ「必殺シリーズ」のプロデューサーとして知られる山内久司さんをお招きしました。山内さんといえば、私にとって強い印象を受けた作品があります。テレビドラマ「葉隠の露」(1979年11月9日放送、出演 岸恵子、緒形拳、昭和54年度芸術祭大賞受賞)で、この作品は今話題になっている坂本龍馬を扱っており(30年前)、ブームの先鞭をつけられたことになります。

そこで今日のご案内の通り、山内さんに「テレビ今昔」ということで1時間ちょっとお話いただき、そのあと意見交換に移りたいと思っています。

(山内氏は、ざっくばらんな語り口で具体的な事例をふんだんに入れながら、独特のテレビ論、番組制作論を展開した。本格的な視聴者参加番組が姿を消したこと、昔のテレビ番組のリメイクがやたら増え、手間をかけない番組作りが氾濫している現状を憂い、制作者の“志”のなさを訴えた。特に大衆迎合主義、視聴率至上主義に陥っている今のテレビをジャーナリズムの喪失と批判した。以下はその要旨)

“なぜテレビは面白くなくなったか”

山内久司(元専務)

<朝日放送に入社したころ>

私が朝日放送に入社したのは昭和30年。民放はまだテレビ局を開局していなかった。まず演芸、歌謡曲の担当ということで、(当時、歌謡曲を担当する人がいなかった)弱冠23歳の男に“おまえやれ”といわれ、歌番組にかかわることになる。

突然、キングレコード、コロンビア、ビクターへ行った。キングレコードでは、今度三橋美智也というのがデビューする、ギャラは7000円でいいから出演させてくれといわれ、大阪の中央公会堂で生放送(当時はすべて生で録音)に出演させることになった。三橋美智也に会ったはじめての印象は、小さくて“なんじゃこの男は”といった感じで、持ち歌も「おんな船頭歌」と「ああ新撰組」の2曲のみであった。もちろん観客も三橋美智也のことは知らなかった。ところが三橋美智也が歌いだすと、その“ええ声”にみんなびっくり、会場は静まり返った。そして万雷の拍手。入社当時はそんな番組をやっていた。

それから森光子出演の「東西お笑い他流試合」(1955年4月8日~1962年5月6日、30分)を担当した。この番組は東京のニッポン放送(LF)と生で結ぶ2元放送で当時としては珍しかった。聴取率もよかった。

{註} 1

聴取率ベストテン

1	夫婦善哉	ABC	32.6%	6	奥様物語	MBS	21.8%
2	お父さんはお人好し	NHK	28.6%	7	浪曲歌合戦	ABC	21.3%
3	お笑い街頭録音	ABC	24.2%	8	すかたん社員	ABC	20.9%
4	東西お笑い他流試合	ABC	23.9%	9	凡児のお脈拝見	MBS	20.7%
5	土曜寄席	MBS	21.9%	10	かしまし娘捕物帖	ABC	18.7%

(59年6月3社共同調査)

「朝日放送の50年史」より

その後、ラジオドラマの制作にもかかわるようになったが、テレビの開局が相次ぎ、ラジオの勢いが衰えると、私もテレビの制作現場に移っていくことになる。

「必殺シリーズ」から「ハングマンGOGO」(1987年6月12日~9月25日、54分)そして「混浴露天風呂」シリーズも私が手がけた。「露天風呂」は視聴率30数パーセントだった。このあと、用もないのに必ず露天風呂に行くというワイドのテレビドラマが相次いで登場してくる。

「必殺」より「露天風呂」のほうが日本の大衆文化に与えた影響は大きいと思う。

<今の「必殺」と僕の「必殺」>

最近のドラマ、テレビ番組は正直言って見ない。ニュースとスポーツ中継、例えば阪神タイガースの試合ぐらいは見ている。なぜ見ないかと言えば、面白くないからだけでなく、いらいらする、精神衛生上よくない。見ていると“何をやっているんだ”という気持ちになるからだ。

「必殺」について言えば(オリジナルの)「必殺」は、はじめは“日常”を描き、そして最後のヤマ場で“異次元”の世界にはいり、人々の興奮を呼び、同情を呼ぶというコンセプトになっている。ところが最近の「必殺」、ジャニーズの「必殺2007」を見ていると、はじめから異次元の世界を描いている。人気者のジャニーズを起用するという点ですでに間違いがあると思う。

藤田まこと演じる中村主水(もんど)は家では妻からバカにされ、同心(現代サラリーマンを映した役)をやっている。中条きよしは三味線作りを職業としている。三田村邦彦は^{かざり}鋳職^{しよく}でこつこつ仕事に打ち込んでいる。主人公はみな地味な世界に生きている。

その男たちが、仕事人になって、いざ“悪”をやるといふときに瞬間的にあのBGM(仕事人の音楽)が流れ、あのライティング(闇の映像化 一筋の光)のなかに現れる。

殺しに行く(ドラマの)最後の15分になって、日常から異次元の世界の人になっていく、(この組み立てが)人々をわくわくさせるのである。今の「必殺」は(物語の)はじめか

ら異次元なんだ。

キャストिंगについても、かつての「必殺」には派手な役者は出演していない（ホームドラマに出演していた緒形拳、山村聡、林与一ら）。そのほうが異次元の世界にはいると面白がでる。

要するに（今の「必殺」を見て感じることは）プロデューサーの制御が行き届いていないということになる。

「必殺仕掛人」のオープニングで次のようなナレーションが流れる。

「はらせぬ恨みをはらし許せぬ人でなしを消す いずれも人知れず仕掛けて仕損じなし
人呼んで仕掛人 ただしこの稼業 江戸職業づくしには載っていない」

つまり稼業という日常性のなかに、世の中に存在しない空間を描こうとしたのだ。

異次元（殺しの場面）の世界から、家に帰ったら日常に戻り、めざしを食うて、嫁はんと姑にかなりいじめられる。

現代のサラリーマンの現実と重ねあわせることができる。今のサラリーマンの男たちは何に自分のレーゾン・デートル（存在理由、存在価値）を求めようとしているのかといえば、ゴルフであったり、パチンコであったりと女房の知らない世界に価値観を求めている。それが自分たちのレーゾン・デートルになっている。

中村主水たちには、チャンバラのようにええ格好しない、戸の隙間からブスッと突く（殺し）、極悪人をひそかにやっつけるというときに女房や社会に知られていないレーゾン・デートルがある。「必殺」はその男の悲しみと快感を描こうとしたのである。

その意味で、今の「必殺」には、僕の作品の意図は全くなくなっている。

《註》 2 「放送史事典」（南利明編、学友会センター発行）によると、

「必殺シリーズ」（1972年9月2日～1987年9月25日、55分）

ふだんは市井で平凡な生活をしている連中が金をもらい殺人を請け負うと、変身して相手に迫り、仕事が終わると元の姿にもどる。従来の時代劇とは一味も二味も違ったドラマ作り、それに大ジャンプや宙を切る三味線のばちのモンタージュなど、独特の映像表現で視聴者をひきつけた。第1作の「必殺仕掛人」の出演は、山村聡、緒形拳、林与一、中村玉緒ら。ムコ殿の中村主水が登場するのはシリーズ2回目の「必殺仕置人」から。（後略）

「朝日放送の50年」II「番組おもしろ史」には

「（模範的な父親を好演している）こうしたタレントが仕掛人になることは、日常性の裏側で悪事を働く、つまり善人が悪人にもなる二面性の怖さを描くことになる」とある。

＜田原総一郎も“視聴率”を意識＞

(今までが前置き) ここから本題に入る。

最近テレビ番組を見ていて、二つのことを感じた。ジャーナリズムがポピュリズムに陥っていること、昔のテレビ番組のリメイクが多くなっていること、この二つである。

「サンデープロジェクト」(ANN系)で司会の田原総一郎が「鳩山首相の献金問題を扱うと視聴率が下がる」といった趣旨の発言をしていた。この発言には驚いた。

今、視聴率は1分おきにデータが提示される。報道局のスタッフもワイドショーのスタッフもそのデータを見ていて、“この話題を扱うと視聴率が下がる”ということすべて把握している。GRP (gross rating point 延べ視聴率) によってスポットCMの売り上げに直接響いてくる時代だけに、報道番組といえども視聴率が下がると、営業の売り上げにも影響してくる現実がある。報道番組といえども視聴率主義なんだ。ジャーナリズムじゃない。(視聴率に触れた) 田原発言にはぞくっとした。

新聞はまだすべての記事を網羅して、さまざまな話題を掲載するが、テレビは視聴率がとれそうな話題しか取り上げなくなった。だからどこのテレビ局の番組を見ても同じ話題しか扱っていない。横並びで、変わった話題がない。視聴率主義である。ジャーナリズムがポピュリズムに墮落してしまっている。

これが今の「テレビの面白くない」理由である。“感じがいい”からと視聴率をとれる司会者を求めすぎる。各局みな同じことをやっている。

{註} 3 ポピュリズム (populism)

「広辞苑」一般大衆の考え方・感情・要求を代弁しているという政治上の主張・運動。

これを具現する人々をポピュリストという。

「岩波国語辞典」大衆に迎合して人気をあおる政治姿勢。

「読売新聞 用字用語の手引」大衆迎合主義
人民主義。

テレビジャーナリズムの基本は、例えば朝日放送と毎日放送の“違った人”が、“違ったこと”をやる、“違った配列”でテレビニュースを編集するというところにある。如何に重大なことであっても、国民のインタレストがないからといって扱わない、これではテレビのワイドショーなり、ニュース番組が病気になってしまう。ちょっとゆゆしき問題だと思う。

国民の知らないことを知らしめる、世論が間違っているときには正す、これがジャーナリズムの大きな使命である。視聴率というのは番組ごとの大体の傾向を知るうえで大切である。1分ごとの視聴率を気にして国民の動向に合わせて番組作りをするというのは、娯楽番組なら少々許されるが、報道番組では絶対にやってはいけない。テレビジャーナリズムは、古い言葉だが「社会の木鐸」(世人を覚醒させ、教え導く)という(先達の)役割を喪失していると思う。1分ごとの視聴率に振り回されている今のテレビの状況は深刻である。

<昔のリメイク番組が多すぎる>

そしてもう一つの問題は、昔のテレビ番組のリメイク、リバイバルがやたら多いことも気がかりである。先ほども触れたジャニーズ系の「必殺」、今どんどん番宣している TBS 系の「赤かぶ検事」、これは私の作った番組で「赤かぶ検事奮闘記」（1980年10月3日～10月31日、フランキー堺、倍賞千恵子他）とタイトルも同じである。

他の番組のマネをしている、この“志”のなさが嘆かわしい。落語に「おでんのようなものをくれ」という話がでてくるが、私はそのような「——のようなもの」を作らないように心がけている。昔のプロデューサーはみんな矜持をもっていた（自分の番組にプライドをもつ）。今は「ようなものだらけ」である。

今のプロデューサーに要求されるのは企画性じゃなくて、タレントを集めてくる能力である。交渉能力、付き合い能力だけがプロデューサーに求められている。もっと極端なことを言えば、プロデューサーはキムタク（木村拓哉）を出演させたい、企画じゃなくてキムタクをつかいたい。だからどうするかと言えば、ジャニーズのメンバーとうまく付き合う、メリー喜多川氏（ジャニーズ事務所の実力者）とうまく付き合わないといけないことになる。この企画を番組化したいから、この役者を起用したいというのではなく、ジャニーズに合わせた、気に入った企画を持っていくということになる。今度の朝日放送の「必殺」も、ジャニーズでやりたいから放送することになった（東山紀之に「必殺」をやらせたい）。私としては改悪されたら困るんだ。しかも今なぜ「必殺」なのか？ もう昭和も終わったのに。僕らの時代のプロデューサーだったら“なんや”と言うだろう。

<ふつうの人が参加する視聴者参加番組がなくなってきた>

さらに今のテレビに言っておきたいこととして、視聴者参加番組がなくなってきたことがあげられる。

ラジオの初期の時代、中田ダイマル・ラケットの「お笑い街頭録音」（1954年10月3日～1961年6月4日、30分）という番組があってもものすごくうけた。

各局もそれぞれ企画を練って、特色を出した番組があったが、今はなくなった。

朝日放送のケースをみると、

蝶々雄二の「夫婦善哉」（1963年8月2日～1975年9月27日、30分）

「ただいま恋愛中」（1970年1月17日～1977年10月30日、30分）

「プロポーズ大作戦」（1973年4月2日～1985年3月26日、30分、75年から54分）

「ラブアタック！」（1976年4月6日～1984年10月14日、60分）

「新婚さんいらっしゃい！」（1971年1月31日、30分～現在放送中）

各局でも同じような個性的な視聴者参加番組が放送されていた。

それが、なぜなくなっていったか。一つの番組を育てるのには手間がかかるものだ。視聴者参加番組の存在がみんなに知れ渡り、定着するまでに1年はかかる。当時はみんなその1年を我慢した。篤農家が稲を育てるように、雑草を抜き、肥料を施し、やっとな育て上げる、

このように昔はじっくり番組を育てた。そして視聴率が次第に上がってきた。

「夫婦善哉」「恋愛中」「プロポーズ大作戦」などの一連の番組は、“夫婦”“恋愛”“出会い”と微妙な男女の意識を（時代を見据えて）探るのがねらいであった。

当時のプロデューサーは朝日放送だけでなく、関西テレビ、毎日放送など各局とも、風俗なり、社会意識なりを真面目に、ジャーナリスティックに考えて、企画を練った。

今は即効性を求めすぎる。芸も何もない漫才師を集めて、単純なしゃべくりをさせるだけ、単に社会ネタをもってきてぺらぺらしゃべるだけ、だから似たようなタレントばかりが並んでいる。そして彼らはそれなりに一応ギャラをもらって、それなりに生活している。だから傲慢なことをやる（漫才コンビ「メッセンジャー」黒田有^{たもつ}のような傷害事件が起こる）。彼らは努力というか、修練を積んでいない。

漫才師はダイマル・ラケットの時代のように芸を磨かなくなった。ダイマル・ラケット、やすし・きよしのビデオテープを見て、あの“間”と“テンポの速さ”を学んでほしい。芸人は芸の喪失、プロデューサーは企画の喪失、あるいは“志”を喪失してしまったか。タレントの芸の喪失ということも言える。例えば、大河ドラマを見ていて、最近の役者でうまいと思うのは本木雅弘と香川照之の二人だけ。大体みんなへたくそである。女の役者も個性がない。ミステリーを見ていてもよく似た顔をしているので区別がつかない。それほど没個性になっている。また時代劇になったら、声を潜めてしまい、日常的にしゃべれなくなる役者が多い。すべての芸の喪失とも言える。

<NHKの「大河ドラマ」はすごい>

時代劇の話に戻すと、テレビの時代劇では、NHKの「大河ドラマ」が大きなウエイトを占め、大きな歴史的役割を果たしている。「大河ドラマ」のすごいところは（一つのテーマで）1年50回（約400時間）、たいへん長いドラマを制作していることである。映画ではこんなことは絶対できない。一番長い黒沢 明の「七人の侍」でも3時間、「赤穂浪士」でも、どんなに長くても前後編合わせて5時間ぐらいである。

テレビの場合、視聴率を30%とったとすれば、毎回ほぼ3000万（1% 約100万）の人が見ていることになる。この猛烈な文化状況を時代劇の「大河ドラマ」は現出するのである。ところが、NHKはこの画期的な状況をあまり意識せず、“「大河ドラマ」、あたた、あたた”といろいろ勝手なことを言っているうちに、（その勢いを）どんどん衰退させていく。実はNHK（「大河ドラマ」）には、企画性がほとんどない。これまでの内容を見ると、「幕末」「忠臣蔵」「戦国時代」を素材にしたものばかりで、こればかりを繰り返し、練り直している。だから「大河ドラマ」のシリーズのうち、3分の1は坂本龍馬、あと3分の1は織田信長、豊臣秀吉、そして残り3分の1に大石内蔵助が登場する（パターンが続く）。これではいけないということで、今回「坂の上の雲」が編成されるのである。この作品はよくできている。（「大河ドラマ」の第1作は1963年放送の「花の生涯」、第48作「天地人」のあと2009年末からスペシャルドラマ「坂の上の雲」がスタート）。

「大河ドラマ」には歴史的な要素があったが、その歴史劇の要素を消したのが1981年放送第19作「おんな太閤記」である。女性ドラマの名手橋田壽賀子の作品で、女性に迎合していく路線（「篤姫」）へとつながっていく。「大河ドラマ」を見て、歴史の勉強をしている人もいるので歴史を歪めないよう、「大河ドラマ」の意義をとらえ直さないといけない。

このように今のテレビ業界を見ていると、「大河ドラマ」も視聴率を上げようと、女性への迎合、田原総一郎自身のポピュリズムへの傾斜などとも相まって、（制作現場ではジャーナリスティックな）手間をかける番組が少なくなってきた。芸事では芸が衰えてきた。視聴率についても世帯視聴率で世帯の傾向を見ている間はまだ許されるが、問題は個人視聴率である。今スポンサーが要求しているのはF1（20~34歳、ここへスポットCMが集中）の女性の購買力。ところが、F1は時代劇を見ないから、これが大きく影響し、時代劇の番組が少なくなっている。時代劇を作る役者、スタッフもいなくなる。からみ、チャンバラをする人も仕事がなくなり、食っていけなくなっている。時代劇の信頼がどんどんなくなっている。時代劇というのは男の孤独とか、ロマンとか、そのような美学なんだ。我慢の美学である。基本的には時代劇というのは、欲望をぐっと抑えて正義のためにやる、ばかばかしいといえば、ばかばかしいがこの世にない美学を求めている。

テレビ全体がこのような番組を作りたいという“志”を喪失して、金儲けだけに走っている。辛抱が足りない。だから、テレビ全体をつまらなくしているのである。

時代劇の主人公はみな家を捨てて、ホームレスである。「七人の侍」「丹下左膳」「国定忠次」「木枯し紋次郎」だれ一人、家を持っていない。全部ホームレスで名誉も金もないが、人のために尽くす、そしてホームレスたちは野武士から百姓のホームを守り、家を大事にしている。これが時代劇の主人公であり、パターンである。そこに気付いて“ああ家があったらおもしろいな”と思い、中村主水の「冷たい家」（幸福じゃない）をつくった。

古いことを言うようだが、「なぜテレビが面白くないか」ということをとり上げて話せば、こういうことになる。

（山内元専務の話が終わったあと、質疑に入った）

「坂の上の雲」の話題、韓国ドラマの人気の秘密から、放送と言論、ネット時代におけるテレビの生き残り戦略まで、話し合いは多岐にわたった。以下はその質疑の一部。

出席者 NHK「坂の上の雲」に登場する夏目漱石、正岡子規の描き方について、
夏目漱石の描き方が軽いと思うが。

山内元専務

「坂の上の雲は」は最近では出色のドラマ。夏目漱石はそうかもしれないが、子規は香川照之の好演もあってなかなかいい。

出席者 韓国ドラマのブームが続いているが、なぜ人気があるのか。

山内元専務

山口百恵が出演していた「赤のシリーズ」によく似ている。わかりやすいメロドラマ、それからへそを出していない男が出ている。今の若い日本の若者はへそを出していて汚らしい。ヨンさまは極めて清潔で、日本の男にないキャラクターをもっている。昔の上原謙とか佐田啓二のイメージ、ものすごく素朴なドラマツルギー（作劇法）である。

出席者 山内さんはわれわれが考えていることをずばり言っていただいて、うれしかった。たいへん難しい質問だが、山内さんも朝日放送という会社の専務まで務められた、経営者というのはそういうこと（編成や番組作りへの提言）にタッチできないのか。

山内元専務

できますが、やっぱり経営者というのは“お金のこと”が第一で、私のときも課題をかかえていた。朝日放送でも昨年 2009 年、収入が 100 億円の減、毎日放送も同じで、民放の経営者は金の問題を優先させないと、下手をすると、会社がつぶれてしまうという時代になってきた。

金のかかる年末年始や期末編成の特別番組をやめるべきだ。

これからの民放の生き方として再放送を多用することも考えないといけない。つまりちょっと制作費を余分にかけて（質を高め）1回の放送だけでなく、何回か再放送することを前提に番組を制作する。しかも一局だけでなく各局で展開していくことが必要だ。

スポンサーも（テレビの）媒体としての価値を見直し始めている。

大量生産、大量消費の時代が終わり、世の中が変わってきており、テレビはターニングポイントに差しかかっている。文化の変化というか、今は多種多様な番組が求められている。ただし、つまらない番組が多すぎるので整理し、何かに特化していくことも考えないといけない。

出席者（放送業界は）メディアの変遷をもう少し深刻に考えないといけない。今のテレビの現状を把握したとしてもそれに代わるものがどんどん出てきている。その延長の真ん中にあるんだということを考え、意識改革しないといけない。それに放送行政のシステムの変更とジャーナリズムの再建というものをトータルで考えないとちょっと無理。売り上げはどんどん落ちて成り立たなくなる、免許という桎梏をはずさないとダメかもしれない。あくまでもお上に守られた免許

制度の中で生きているという考え方をはずしてそれでもやっていけるかどうか。

山内元専務

民間放送は最後の「護送船団方式」をとっている。ほかのどの業種も全部この方式から外れている。民間放送はこの「護送船団方式」を守るため、CSにもBSにも手を出し、ほかの業種が入ってくることから守った。テレビメディアの業績が好調だったからできたのだが、今は視聴率が落ち、営業成績も落ち、しかも図体が膨れ上がりすぎて給料が高い、まさしく再建途上のJALの二の舞になりかねない状態になっている。

(「護送船団方式」 経営体力、競争力に欠ける事業者が落伍することなく存続していけるよう行政官庁がその許認可権限などを駆使して業界全体をコントロールしていくこと)

出席者 テレビは言論機関か。放送法で縛られているためか局独自の主張が出ていない。

山内元専務

放送法では、多様な意見を多角的に扱うこととなっている。新聞には放送法のような法律がなく、縛られていない。放送は電波法と放送法に守られて、いわゆる「護送船団方式」でレアなジャンルでやってこられた。

(このあと、しばらく“放送と言論”について議論が続く)

◎テレビは報道機関であっても、残念ながら言論機関であったということは歴史的に見て希薄。

◎その点、新聞は法律で縛られていないので自由な言論が展開できる。

◎テレビもやれるはずだが、だれもやってこなかった。

◎残念ながらとはいえ、放送が言論機関でないと聞いて愕然としている。情報が拡散し、いろいろなメディアに取り上げられているときに、テレビ局が言論機関として必要な機能をしっかり発揮していかないとダメだ。しかも新聞はどうにもならない状態に陥っている。もし新聞が言論活動できなくなったら、どこが引き受けるのか。やはり最大のメディアで、映像をもっているテレビしかないと思う。そういう姿勢(意識)が今、報道に携わっている人にあるのか。

◎ジャーナリズムかポピュリズムかという問題で言うと、世論操作が一番怖い。大阪センチュリー交響楽団が大阪府の補助金削減でつぶされかけている。橋下知事がテレビに出演し視聴者に向かってテレビ向きの発言をする、それに対して“突っ込み”を入れる人が一人もいない。知事の発言に対して、このような見方もあると批判する人がいてもよいのではないか。

山内元専務

日本人の価値観は今、みんな“数字”がベースになっている。(橋下知事の)支持率が70%だから、ゲストとして呼ぶ。小泉首相のときも(マスコミは)持ち上げたが、これがテレビジャーナリズムの欠陥だと思う。日本人が幼児化している一つの表れだ。

知事の悪口を言ったら一斉に電話がかかってくるという。110番に、風呂の戸を開けてほしいと電話してくる時代だから、日本全体で一種の幼児化現象が起きていることになる。

ジャーナリストが視聴率を気にし始めたのは病気だ。僕らの時代は数字が悪くても、番組は存続した。確かに僕らの時代もすべて数字だったが、数字だけではない意識みたいなものが制作者にあり、(番組に)携わった人にもあった。今はそういった人がいなくなってしまった。

出席者 私が入社したころは、まだ各局にそれぞれ局のカラーがあった。各局に違いがあり、方向性があった。これからの放送を考えると、放送に携わる人が何か志を持つきっかけになるようなものを見つけ出すことができないだろうか。

山内元専務

僕はペシミスティック、しばらくテレビは落ちまくる、大河の流れをちょっとせき止めることができない勢いで。最後はどこで踏ん張れるか。昔は視聴率さえ上げれば売れた。リーマンショック以降、景気が悪いというだけでなく、他の媒体が魅力的になってきて伸び悩む。ラジオはすでにインターネットに(売り上げが)抜かれている。地上波のテレビはデジタルに切り替わったところで放送局の再編を考えていかざるを得なくなる。朝日と毎日が合併するとか、関西テレビと読売テレビの合併を現実として考えないといけなくなる。チャンネル数が半分になればスポンサーが殺到する。そして(業績が)よくなる。

出席者 話が収斂されてきた。(今日の話では)「放送人の志の喪失」というところが多くの人に伝えたい、聞いてもらいたいキーワードである。このことを、それぞれの放送局のスタッフにできるだけ早く気付いてもらいたい、われわれの願いでもある。

山内元専務

僕はまだ顧問という肩書きがあるので、会社に行って現経営者にいやなことを言っている。そしたら“あんたの時代はよかった”ということになる。

出席者 テレビの影響力はまだ大きい。子どもを叱るとか、家庭の崩壊、地域社会の崩壊といったテーマについてもテレビはもっと伝えていかないといけない。

山内元専務

今のテレビは古いことより新しいことがいいことだ、「新しいこと、いいこと」という価値観が支配しすぎている。

出席者 (この会合が) 単なるボヤキに終わらず、「今の放送メディアがどのような問題をかかえているか」をテーマにシンポジウムを開くなどして行動を起こす時期にきている。声をあげてメディアへ発信していくことが大事である。

山内元専務

新聞ジャーナリズムがテレビメディアを批判すればよい。かつてNHKのドキュメンタリー番組「奥ヒマラヤ・禁断の王国ムスタン」(1992年9月30日、10月1日放送) でやらせ問題が起きたとき、活字ジャーナリズムが映像ジャーナリズムを痛烈に批判したことがあった。メディア同士の批判はなくなった。

以上